

徳山藩江戸藩邸変遷 その時代背景とともに その二

会員 小原 肇

芝高輪二本榎下屋敷

今井谷に上屋敷を拝領した同じ年（一七一九）に下屋敷を、芝高輪二本榎（二千百五十四坪、現在の港区高輪三丁目、グランドプリンスホテル新高輪の西側付近）に拝領している。こちらの下屋敷は相對替・囲込み・売買等をくり返し三千五百坪くらいまでになったようだ。この高輪二本榎下屋敷の通りをはさんだ東隣りには薩摩藩下屋敷があった。

ちなみに慶応四年（一八六八）三月十三日、十四日の両日、西郷隆盛と勝海舟の江戸城無血開城の話し合いが薩摩藩邸で行われたが、薩摩藩上屋敷は前年の焼き討ち

で焼失していた為、十三日がこの下屋敷で、十四日がこよりほど近い蔵屋敷（現在の田町駅）で行われた（現在蔵屋敷跡の方に記念の石碑がある）。徳山藩高輪下屋敷近くの品川宿は東海道五十三次の第一宿、西国へ通じる陸海両路の江戸の玄関口として賑わい、旅籠屋敷や参勤交代の大名通過敷においても他の街道と比べ多く、吉原と並ぶ歓楽街であった。この品川宿は徳山藩高輪二本榎下屋敷からも目と鼻の先、徳山藩士達もたまには他藩士との情報収集がてら羽目を外すなんてこともあったであろう。この品川宿には高級妓楼の「相模屋」（土蔵相模）があり、文久二年（一八六二）の高杉晋作・久坂玄



高輪二本榎下屋敷の位置 (右側は江戸湾)

瑞らによる英国公使館焼き討ち事件(徳山藩士遠藤貞一郎も参加)の実行前にはここに泊まり込んで謀議を重ねた。この英国公使館のあつた御殿山もすぐ近くである。

徳山藩下屋敷からも燃えさかる御殿山は目前に見えたはずだ。更にさかの

ぼる事三年の安政

七年(一八六〇)

の桜田門外の変の

首謀者の水戸藩浪

士ら十八名は前夜

にやはりこの「相

模屋」で宴をはっ

ていた。徳山藩士

達のすぐそばで幕

末は進行していた

のだ。道をはさん

だ東隣り薩摩藩下

屋敷(現在の品川

駅前)は東海道(現在は第一京浜)に面し、その目の前には海(江戸湾)が広がっていた。上図表示が家紋ではなく黒丸印なのは下屋敷という意味だ。

江戸の街は、明暦三年(一六五七)の大火により、都

市部の約六割が焼け五百あまりの大名屋敷が焼失したと

いわれている。大火以後、諸大名の下屋敷は郊外へ移転

することにより、非常時の際の避難場所としての役割も

持った。当時は江戸の南の外れであった高輪地区に徳山

藩が下屋敷を拝領したのもこういった理由によるもので

あろう。実際に徳山藩も寛文八年(一六六八)三田小山

の上屋敷が類焼した際に下渋谷の下屋敷に避難したとの

記録もある。「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるよう

に江戸の火事は大火以外も含めて幕政二百六十七年間で

約千八百回を数えており、徳山藩邸の類焼、焼失も上下

屋敷併せ十数回にのぼっている(徳山市史料)。

以降、幕末までの約百五十年間の徳山藩邸はこの今井

谷の上屋敷と高輪二本榎の下屋敷となった。

元治元年(一八六四)、幕末の禁門の変に対する幕府

からの仕置きとして、萩の宗藩に連座し、支藩の清末藩、長府藩と共に徳山藩のこの今井谷、高輪の上下屋敷も没収された。江戸藩邸の徳山藩士達約四十名は館林、上野安中、備中新見（いずれも徳山藩の親戚）の三藩に幽囚された。萩藩士達が百名以上拘束され半数近くが獄死したのに比べ徳山藩士は数人が病死したのみで三年後に無事帰藩している（※1）。萩藩邸は数千人の鳶人足により徹底的に破却され木材は風呂屋に下され、藩邸内にあつた文物書籍は越中島で焚棄された。一方で徳山藩今井谷の上屋敷は破却されず（※2）、幕府若年寄兼外国奉行の堀直虎（信濃須坂藩）の屋敷となつた。慶応四年（一八六八）一月堀直虎は江戸城内で自害、異母弟の堀直明（恭之進）が養子として跡を継いだ。萩藩屋敷が徹底的に打ち壊され、その際萩藩が幕府に取り上げられ越中島で焚棄されたはずの日記等書類の一部はこの今井谷の徳山藩上屋敷内の土蔵二ヶ所に入れられ封印されていた。

明治維新後すみやかに各藩は藩主居住の一部上屋敷以

外を新政府に返上した。慶応四年八月、返上され新政府の物となつていたこの今井谷屋敷の土蔵内にあつた前記書類は徳山藩九代藩主毛利元蕃の要請により無事返還された（※3）。この頃毛利元蕃は新政府より大手門前の酒井雅楽の元屋敷を借りていたらしいのだが、慶応四年六月に新政府からの要請で返却している（※4）。

江戸城大奥の上臈御年寄 姉小路（勝光院）

江戸城大奥女中の最高位、上臈御年寄じょうろうごねしよりであつた姉小路（公家の出・皇女和宮の大叔母）は十二代將軍徳川家慶死去後、引退し勝光院と名乗りこの徳山藩麻布今井谷上屋敷で隠居していたが、手狭になつてきたので徳山藩は文久元年（一八六一）、隣の青山大膳大夫の敷地の内百五十六坪余りを勝光院の為に借受けた（※5）。上臈御年寄としての姉小路は時に幕政や幕府人事をも左右するほどの権力を握っていた。公武合体を推し進める幕府にあつて、翌文久二年（一八六二）の皇女和宮の降家にも勝光院は関わっていた。隠居していたとはいえかなり

の権力を持っていて政治向きにも口出しできたようだ。元治元年（一八六四）禁門の変の仕置きで萩宗藩に連座し、徳山藩も江戸藩邸を没収された際、萩宗藩の屋敷が徹底的に破却打ち壊されたにもかかわらず、徳山藩の上下面屋敷が壊されなかったのも姉小路がいたからであるかもしれない。

元々姉小路は文政九年（一八一九）に大奥に入った後、十一代將軍徳川家斉の娘和姫が萩藩の世子毛利斉広に輿入れする際に和姫に従い萩毛利家江戸桜田上屋敷に入ったが、わずか一年足らずで和姫が死去したため、再び大奥に戻った経緯があり、毛利家には縁があった。將軍家の縁組に関しては姉小路が独断で差配していたとされ、後の十三代將軍徳川家定の正室・篤姫の輿入れに際しても、当初は大奥側の担当者として島津家との交渉を行っていた。一方で、政敵への陰謀の画策や天保の改革の妨害を試みるなど、政権運営にも影響力を及ぼし、財政の逼迫などの幕府破綻要素をつくったともされている。通常姉小路のような上臈（高級女中）は江戸に身元引受人

が必要であり、お宿下り、たまの休暇はこの身元引受人のところで過ごす。大身の旗本などが引受人となる例が多いのだが、姉小路のお宿下り先は徳山藩もつとめた（弘化二年（一八四五）届出）。更に嘉永六年（一八五三）引退後、徳山藩今井谷上屋敷の敷地内に住まいを建て安楽な隠居生活を始めた。「御連枝並之御取扱被仰付之」とあるように徳山藩は彼女を將軍の親戚大名並みの取り扱いをするよう命ぜられている（※6）。

姉小路は、第九代水戸藩主・徳川斉昭ともしばしば直接に書面を取り交わしていた。姉小路の妹・花の井も水戸藩上臈年寄となっていたこともあり、徳山藩はこの花の井の休息所も引き受けていた（※7）。長州（萩）がらみであろうとは言え、なぜ徳山藩のような小藩がこのような大奥の大物とここまで関係が深いのかは、よくわからない。徳山藩江戸屋敷という側面を調べていて思いもよらずこのような大奥との繋がりがまでたどり着いたことは非常に興味深い。

明治維新後の屋敷

明治二年（一八六九）、毛利元蕃は今井谷の同じ屋敷を徳山藩知事邸として新政府から再び拝領した。確かに東京市史稿市街篇附圖第二の明治四年東京繪圖を見ると今井谷に「毛利アハヂ」の名前が見える。明治四年（一八七一）に毛利元蕃が自ら藩知事を辞し徳山藩を廃し本家の山口藩に合併した際に今井谷藩邸は返上し、愛宕下屋敷（現在の新橋六丁目愛宕警察署付近・二千百十四坪）を購入しそこで隠居生活を送った。子の元功は英国留学から帰国後、明治六年（一八七三）に芝二本榎高輪南町（芝高輪南町三十六番地四千七百七十坪）を購入、そこに洋館を建設した。藩政時代の高輪二本榎の下屋敷の向かい側（グラランドプリンスホテル新高輪国際館付近）である。

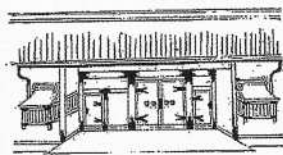
その後、明治二十九年（一八九六）にこの高輪南町の屋敷を売却、赤坂溜池壺南坂町（現在の赤坂一丁目壺南坂教会西側付近）の屋敷に移った。子の元秀の時代になった昭和七年（一九三二）には目黒区中目黒一丁目

（二千百五十五坪）に移っている。この中目黒には現当主の毛利就慶氏が今もお住まいであると聞く。

青標紙

「青標紙」（※8）とは江戸時代後期、天保時代に出版された「武家故実書」。武士は「武家諸法度」等により厳格に縛られており、大名屋敷の門等の様式規定も石高による厳格な規定が設けられていた。徳山藩もこれに準拠した左図のような門を持つていたはずだ。萩藩のような独立門とは異なり、徳山藩は長屋門となる。

僅間扉懸十方石作之
五万石以下
万石以上表
門作之両番
所格子出シ
出
石垣両番秀
是出五万
石以上也



五万石以下大名の表門 長屋門、付屋根庇造石垣壘、出両番所格子出し

徳山藩邸の門はどのようなものであったか

徳山藩邸門を類推させる写真(左)がある。小大名格の武家屋敷門として格調正しい様式を備えており、一五万石小大名格の形式を良く伝えるものだ。前述の「青標紙」の格式・様式にも合致し、同等格の徳山藩上屋敷門も限りなくこれと同様な物であったと思われる。萩藩



駿河沼津藩水野出羽守(五万石)
日比谷上屋敷門

桜田上屋敷の斜向い(現在の霞が関一丁目の厚労省、日比谷公園向い)付近にあったもので、海城中学校の正門として使われていたが、昭和五年に取り壊されている(※9)。

大名屋敷あれこれ 切絵図

前田家の本郷上屋敷などは約十萬四千坪(東京ドーム七個分)もあった。とにかく大名屋敷は広大で入り口(正門)を探すのにも大変で、また表札も無かったため切

り絵図(左上図)がよく売れたといわれる。切り絵図には正門がある方を上にして藩名や家名が書かれているの



で正門も探しやすい。江戸には各大名の国元から江戸詰を命じられてやつ

てきた多くの地方出身の武士たちがいたが彼らは江戸の町に不案内で、しかも表札が掛けられていなかったとなれば、住宅地図のように作られた江戸切絵図



芝愛宕山から望む明治初頭の江戸の大名屋敷(撮影:F・ベアト)



「江戸勝景 日比谷外之図」歌川広重 広重画帖

は他の屋敷へ遣いに行くときなどは重宝しただろう。前頁の愛宕山からの写真を見ると確かに表札が無ければどこが誰の屋敷で入口（正門）がどこかはこれではわからなかっただろう。江戸詰めになった先祖の徳山藩士達も、現在の日比谷公園にあった萩宗藩の上屋敷へご挨拶に出かけるなどといった際には、切絵図を持って出かけたことだろうことが想像される。次の絵

図（上図）は萩藩毛利家桜田上屋敷（現在の日比谷公園）を描いた浮世絵であるが萩藩は国持大名であるため、長屋門ではなく両側に番所を持つ立派な独立門を構えている。門に繋がる二階建て長屋も

見える。奥には日比谷御門（現存せず）が見える。浮世絵には、江戸市中を歩く旗本や大名行列を描いたものも多数あり、参勤交代で帰国する勤番侍のお土産として人気があったようだ。豪壮な大名屋敷が建ち並ぶ江戸は、地方の人達の憧れであったであろう。徳山藩士達もきつと買つて帰つたのではないだろうか。

大名屋敷の遺構として元の場所に現存する物はほとんどない。他所に移築された門



鳥取藩池田家上屋敷門

等もわずかに残るだけだ。表門で残っている物で有名なものは加賀藩前田家の赤門（東京大学）であろう。次写真はもう一つの現存する、鳥取藩池田家（松平）上屋敷の表門（三十二万五千石）。屋根は入母屋造り。門の左右に向唐破風造の番所を備えた格調高いものである（江戸末期のもの

と推定される)。現在は上野公園横に移築保存されている。前述の広重浮世絵に見られる萩藩桜田上屋敷の表門は石高格式から類推してもこれと同様なものであることがわかるだろう。

萩藩の屋敷の門が埼玉県狭山市の狭山不動尊（狭山山不動寺）に移築され、現存している。明治五年（一八七二）、高輪の久留米藩有馬家下屋敷跡に毛利元徳が新築した屋敷にあったものを、同地の品川プリンスホテル開業前にこの寺に移築されたものである（※10）。



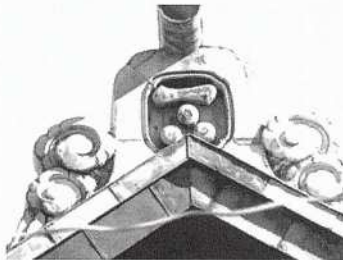
不動寺総門として使われている門

狭山山不動寺の開山は昭和五十年と新しい寺だが、西武鉄道のオーナーであったが、西武義明が建てた寺院で、各所から門等に移築した。埼玉西武ライオンズが優勝祈願することとで有名で、西武ドーム球場近くにある。ここには芝増上寺の二代将軍秀忠の廟である台徳院靈廟にあった勅額門を

はじめ芝増上寺にあった様々な遺構も移築されている。要は西武鉄道が大名や宮様の土地を買収して、その上にホテル等を建築する時に、じゃまになった歴史的建造物を移築・保存するために造った場所とも言える。萩藩屋敷の遺構が意外と身近なところに残っていた事に改めて驚く。



狭山へ移築前、高輪邸時代の門



屋根頂上にある毛利家家紋一字三星

最後に くおのぼりさん今昔く

徳山藩江戸屋敷研究を進めていくと徳山藩は、小説やドラマの中の話しだけと思っていた様々な江戸の事件も

意外と身近なところで起きている事がわかり、またそのような視点も織り交ぜながら江戸藩邸研究をすると、わかりやすく堅苦しくなくていい。徳山藩士達も同じ時代を生き、忠臣蔵や明治維新も江戸在の徳山藩士達のすぐそばで起きていたのだという事が改めて実感できる。利権を狙い出入りする御用商人や殿様の生活等、紙面の都合上書けなかつた事が沢山あつたのは残念だ。

江戸の大半を占める武家屋敷。綺羅を飾り、見栄をたてる武家のこと、豪壮な大名屋敷の見物は当時江戸観光のひとつだったという。徳山より江戸番手や参勤のお供となり、人口百万人とも二百万人とも言われている大都市江戸に出てきた徳山藩士たち。

「ほほう、これが梅鉢紋の加賀藩百万石前田様のお屋敷か。さすがにご立派なものよのう。」

外出には許可が必要であつたとはいえ、きつと非番の日に「おのほりさん」感覚で切絵図を持ちながら慣れない江戸の街を歩くこともあつたであろう。そんな先祖たちの姿を想像すると、ちよつと微笑ましく身近に感じて

しまう。東京といつても西の外れに住む私が資料確認のため、切絵図の替りにスマホの地図アプリを見ながら三田や麻布の街を歩いている自分とふと重ねあわせてしまった。

いつの世も「おのほりさん」は変わらないものだ
な・・・。
おわり

【注釈】

※1 徳山藩士幽囚 館林藩主秋元志朝は九代藩主毛利元蕃の弟、安中藩主板倉勝意の妻は七代藩主毛利就馴の娘、新見藩主関政富の娘は同毛利就馴の正室。幽囚された徳山藩士達へは、特に責任藩とされた館林藩の手厚い保護があつた。「徳山地方郷土史研究 矢嶋作郎伝・上野国秋元館林藩の奮闘…栗崎健氏」参照。

※2 屋敷没収 徳山藩に下された罪は萩藩と行動を共にした連座であり、本藩と違い「禁門の変」への関与が薄かつたため、没収はされたが破壊されなかつたともいえる。

※3 徳山藩今井谷没収屋敷土蔵内の書類 防衛省防衛研究所陸軍省大日記（東京府より堀恭之進への往復書簡）より 東京府（新政府）から旧家主である堀恭之進へ、封印された土蔵内の

大膳太夫（毛利元徳）の日記類その他の品を毛利淡路守（毛利元蕃）家来へ引き渡してよいか尋ねたところ堀は、「旧幕府より預かっただけのものであるので、淡路守への引き渡し・片付けはどうぞ御勝手になさってください」と返答している。なぜ萩藩の書類等が徳山藩上屋敷土蔵にあったかは不明。萩藩の屋敷没収命令が元治元年（一八六四）七月二十六日で、翌日の夜に明け渡す事を決定するまでの間に急きよ移したものと推察する（その時点で徳山藩邸の没収は決まっておらず、徳山藩邸は二カ月遅れて同年九月に没収されている）。

※4 太政類典（国立公文書館蔵）より 「元年六月十日毛利淡路守へ貸与セシ酒井雅楽屋敷ヲ返納セシム 毛利淡路守へ達先達、酒井雅楽屋敷御貸渡二相成候処 今般御入用に付 致送上候様被仰出候事」（一八六八年、明治元年＝慶応四年）

このように返却した記録はあるが、いつから借りていたのかは不明。酒井雅楽頭（姫路藩）の江戸城大手門前（現在の三井物産あたり）にあった上屋敷のことだろう。江戸城明け渡し（同年四月）による大名屋敷の返上後であろうから、借りていたのはわずか二ヶ月足らずか。明治二年（一八六九）には明治維新に最大の功績

があつたということで朝廷が、萩藩主に同じ酒井雅楽屋敷を下賜している、「今般御入用」とあるのは、萩藩に貸す事が前提だったのか。いずれにせよそれよりも前に徳山藩毛利家が借りていたことになる。

※5 御隣青山家御屋敷御借地之事 文久元年辛酉二月晦日勝光院殿住居所手狭二付青山大膳大夫殿屋敷内百五拾六坪余御借地相成（徳山市史史料）

※6 弘化二年己巳八月十五日京都橋本中納言殿妹、御本丸上臈御年寄姉小路殿由緒有之候付、向後此御方江御宿之御届出成、後嘉永六年癸丑十月十日江戸今井谷御屋敷江御引取之御届、同月廿七日姉小路殿剃髮勝光院殿と称之、於此御方二御連枝並之御取扱被仰付之（徳山市史史料）

※7 嘉永五年壬子九月十一日水戸家上臈御年寄花の井向後病氣其外共、姉小路殿統柄候付休息所引受之御届相成（徳山市史史料）
花の井は元々、大奥の上臈御年寄で唐橋と称していた。唐橋は自分が大上臈としていた徳川家斉の娘峰姫が水戸徳川家に嫁いだ時に一緒に水戸藩邸に入ったのだが、水戸家の嫡子徳川家昭の子を身ごもってしまったため、花の井と改名して水戸徳川家に

上がる事になったという。

※8 「青標紙」 江戸時代後期、大名家屋敷門は幕府より大名格式（石高）による門扉、くぐり戸、門番所の形態が厳格に定められていた。江戸時代に武家故実を解説した小型本（折り本）「青標紙」は、天保十年（一八三九）と十一年（一八四〇）の二回発刊された、その中に大名屋敷の門と門番所についての格式を示した絵が載せられている。

※9 舊大名屋敷御門 麴町区 「江戸の今昔」五世歌川廣重（湯島寫真場）昭和七年 より

※10 萩藩麻布下屋敷の門（埼玉県狭山市） 腕木門と呼ばれる木戸門で、ここまでの大きさの物はあまりない。大名屋敷門の格式からするとこれは表門ではなく、脇門か屋敷内邸宅門か。門前の説明板には、「長州藩毛利家江戸屋敷から移築したもの。」等としか書かれていないので、毛利元徳が高輪に屋敷を新築した際（明治四年）に新たに建造したものかもしれない。

〔参考文献〕

・「矢嶋作郎伝・上野国秋元館林藩の奮闘」 栗崎健 徳山地方郷

土史研究 第三六号平成二七年

・「東京市史稿市街篇附圖第二・明治四年東京繪圖」 国立国会図書館

・「相對替屋敷繪圖 五号」 国立国会図書館

・「歌川広重 広重画帖」 国立国会図書館

・「青標紙」 大野広城 天保十一年 国立国会図書館

・「江戸大絵図」 東洋文庫所蔵 元禄年間頃

・「江戸の女の底力」 氏家幹人 世界文化社 平成十六年